

経友会 ニュース

第20号

ご質問・お問合せ・メールのご登録は
大阪市立大学 経友会
(大阪市立大学 経済学部同窓会)
keiyukai07@sakai.zaq.ne.jp

2011(平成23)年3月25日発行

第6期 平成22年度 経友会講座

田中記念館 大会議場で10月7日 開講

開講に当たり脇村 孝平経済学部長は、自身が本学経済学部卒業生であることの気持ちも込めて受講生に対し、「本学は、創立の起源を辿ると1880年の大阪商業講習所創設に遡る130年の長い歴史と伝統を有する大学である。伝統があるということは歴史的資産として、数多くの卒業生が各界で活躍されてきたし、また現在も活躍されている卒業生が多くいるということである。今年で6年目を迎える経友会講座は、こうした卒業生のご協力のお蔭で開講できるのである。学生諸君にはこの講座で生きた産業経済を学んでいただき、社会で働くということはどういうことかを主体的に考えられたい。」との強い激励の言葉を贈られた。

本年度の講座受講者数は565人と従前に比べ減少しましたが、これは規模の縮減を図るためⅠ部学生の受講者を2、3回生に限定する措置をとったためです。

●学部別受講者数

	経済学部	商学部	法学部	文学部	合計	社会人聴講生
Ⅰ部学生	273	31	42	15	361	40
Ⅱ部学生	88	38	51	27	204	
合計	361	69	93	42	565	605



脇村経済学部長



第1回 平成22年10月7日 私の参謀体験としての「経営戦略・経営企画」の実践例

甘田 外成氏

[昭和40年 経済学部卒]

元 東洋製罐㈱

専務取締役 経営企画本部長

甘田氏は、はじめに会社の寿命は一般に30年といわれていること、それを超えて存続するには確固たる企業理念を持ちながら現実的に対処しうる経営が大事であることを説明された。そしてグループ会社75社を擁する東洋製罐㈱が高度成長期以降の第2の発展への混迷期から現在の新創業時代への再成長期にいたる間、経営陣の中核として模索され実践されてきた経営戦略についての要諦と、経済界の先人や有名経済人の考え方などを熱っぽく語られた。

終わりに学生たちに、企業人として成長するには、廻りに流されないこと、強い意志を持ってやり遂げる勇気を養うことが肝要であると強調された。



第2回 平成22年10月14日 デジタルカメラ産業の海外展開と国内回帰

竹内 淳一郎氏

[平成9年

大学院経済学研究科修了]

元 ミノルタ㈱

日本大学経済科学研究所 共同研究員

竹内氏は初めに日本のカメラ産業が戦後早くから輸出産業として発展し、欧米に販売拠点を構築すると共に技術革新をいち早く取り入れて新製品の開発など業界をリードして世界のカメラ市場を席巻してきた歴史を詳細な数字・グラフを使って示された。また今日のグローバル化の中で、高機能・高品質の追求、グローバルなアフターサービスなどで日本のカメラ産業は高いブランド力の維持と向上を目指していること、また近年は技術の流失防止のため国内回帰の傾向があると説明された。最後に学生たちに、在学中に英語会話を身につけること、内気でシャイな殻を捨て海外を見て歩くことを熱い口調で語りかけられた。



第3回 平成22年10月21日 リーマンショック以後の経済構造の変化と中小企業(製造業)の対応

山下 秀夫氏

[昭和40年 経済学部卒]

(株)山下科学工業所

代表取締役社長

山下氏は、学生たちに中小企業に関する基本的な知識を持ってもらい、進路を考える上で一助にしたいと切り出された。はじめに、近年の世界経済の構造変化の状況を解説され、日本経済の課題と転換の必要性について、特定産業・特定市場に過度に依存した「単極の構造」から多様な産業が並び立つ「多極の産業」への転換が求められることを説明された。またものづくり中小企業群も「ピラミッド型分業構造」に過度に依存していることから脱却していく必要に迫られていることや、関西企業に期待される新産業の分野、環境ビジネスで頑張っている中小企業の例を説明された。またウレタンゴム製造で高度技術を保有するポリマー技研工業社長の小谷和良氏とその製品を教壇で紹介された。



第4回 平成22年10月28日 トヨタ自動車における物流

吉本 真人氏

〔昭和58年 商学部卒〕

トヨタ自動車(株) 物流企画部
企画総括室長 担当部長

吉本氏はトヨタ自動車(株)について、主要生産工場が国内に15工場、海外に51工場、連結子会社が522社で総従業員数32万1千人を有する世界的な大企業である現況を説明された後、国内・海外工場の物流のシステムと運用の実際について映像を使って分かりやすく解説された。その中で、物流の空間・時間の効率化を徹底する手法として東南アジアに部品生産コンプレックスを配置し現地での生産、海外への輸送を運営している最新の状況や、トヨタ独特の必要なものを必要なときに必要なだけ運ぶという多頻度少量物流の思想、そしてトヨタが実際に取り組んでいる国内や海外における物流、環境への対応としての物流集約化・輸送手段の選別などの事例を詳しく説明された。



第5回 平成22年11月4日 銀行業界の変遷と地方銀行の今後について

奥野 浩氏

〔昭和51年 商学部卒〕

(株)京都銀行
常務執行役員 営業統轄部長

奥野氏は近年の銀行業界の変遷と地方銀行の特徴、京都銀行の経営戦略について話された。はじめに1985年のプラザ合意によるドル安協調介入が契機となったバブル経済発生と、バブル崩壊の引き金となった90年の土地関連融資の総量規制について、またバブル崩壊による不良債権発生とこれに関連する不動産関連会社や金融機関の破綻などの状況、そしてこの状況で処理する体制の整備や金融安定化のための法整備などを時系列で克明に説明された。また銀行財務安定化のための自己資本比率規制(BIS規制)と規制緩和の取り組み(日本版ビッグバン)の進展について具体的にわかりやすく説明された。最後に京都銀行は企業内に「金融大学校」を設立し地域社会のリーダーとして活躍できる人材育成に努めていることなどを紹介された。



第6回 平成22年11月11日 食品業界における商品企画・マーケティングの実際

緒方 正和氏

〔平成13年 経済学部卒〕

江崎グリコ(株)
マーケティング部菓子グループ

緒方氏は江崎グリコ(株)の沿革と事業規模、企業グループと海外進出の状況を紹介された後、食料品製造業の出荷額は25兆円で、これは輸送用機械製造業、化学工業に次ぐ第3位の地位にあること、また菓子製造業の出荷額は約2.3兆円で、そのうち干菓子製造業の中ではチョコレートが約3千億円で最大の商品であることを数字資料で詳細に説明された。次に消費者の食に対する安全志向や少子高齢化、業界再編・資本提携など業界の課題と取り組みについて、またこの業界では流行に左右されないロングセラー商品や企業の顔となる定番品を育てることの重要性について事例を挙げて分かりやすく話された。最後に商品企画を成功させる要諦は、情報の収集・変化を見抜く感覚・人の行動に対する観察と洞察力を養うことにありと強調された。



第7回 平成22年11月18日 FPの現状と今後

河津 敏彦氏

〔昭和51年 商学部卒〕

(株)サンライズコンサルティング
代表取締役

河津氏は、大和証券や外資系証券会社でOJT指導者として生保・損保・投資会社のプロを対象に講座を開いてきた経歴を生かして現在の会社を設立したことを話された後、顧客の生涯生活設計を実現させるためのファイナンシャル・プランニング(FP)の作成と実践について講義された。FPの実践では人生の3大資金需要額や家計チェックの仕方・ライフイベント表の作成・未来のシミュレーションなどを解説され、その中で可処分所得・源泉徴収票の見方といった実生活に即した知識も盛り込まれた。学生たちには社会人となってから将来の人生設計を考える上でも大変参考になる講座であり、テンボの良い講師のお話に引き込まれて真剣に聞き入っていた様子であった。



第8回 平成22年11月25日 ベンチャーキャピタル業界の現状と課題

藤井 常雄氏

〔昭和48年 経済学部卒〕

安田企業投資(株)
代表取締役社長

藤井氏は、はじめに自社の創立の沿革と日本の大手ベンチャーキャピタル(VC)の規模・ランキングやベンチャー企業金融・支援制度の変遷等を説明された。次にベンチャービジネスへの投資を通じて新産業創出、雇用機会の増大、資本市場の活性化、出資者への還元、新たな投資という産業経済の循環においてVCが中核的役割を担っていること、またそこでのベンチャーキャピタリストの役割と必要な能力など専門的な幅広い視野から話された。また近年の日米VCのセクター別投資動向の比較で、投資動向の相違が見られることなど興味深い話や、自社を例にベンチャーキャピタルファンドの構成と運営のシステムなどを詳しく解説され、聴講者には今日のVCの活動やその金融システムの現況が良くわかる講義であった。



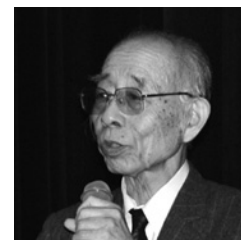
第9回 平成22年12月2日 日本のバブル崩壊と米国の住宅価額下落による大不況等を巡って

建部 好治氏

〔昭和28年 経済学部卒〕

(株)建部会計不動産事務所
代表取締役

建部氏は1990年1月の日本の株暴落、バブル崩壊、2006年のサブプライムローン対象の住宅価額下落に端を発した日本・米国それぞれの金融破たんや大不況の局面を医者の病気を診る目になぞらえて解析した資料を提示して、両国の現象・原因・対処・特徴を詳細に説明し、その類似点や相違点などを浮き彫りにされた。その高度な専門的視点からの分析は、難解なところがあったが、大不況の比較表は簡潔に整理された分りやすい貴重な資料であった。また建部氏が独自に開発された住宅価額指標・GDP・年取趨勢推移表による局面分析では、住宅価額指数が他の二つの指標と大きく乖離していく時点でバブルの到来を予見できたことを披露されるなど学生の関心をひきつけた。



第10回 平成22年12月9日 船会社から見る日本と世界 ―商船三井の歩みとともに―

三澤 豊氏

〔昭和52年 法学部卒〕

関西汽船(株) 執行役員
営業副本部長

三澤氏ははじめに世界物流の基本的な知識として、世界の貿易量が1985年～07年までの間に33億トンから74億トンと2倍強になっていること、また日本の貿易はエネルギー・原材料の輸入と、それを基にした鉄鋼・機械・自動車等の製造品輸出が主体であること、また日本はエネルギー・鉱物資源・食料の自給率が極めて低位であることをグラフ等で示された。次に日本の海運の沿革について明治期の大阪商船の誕生、1942年の三井船舶の設立、64年の海運不況後の中核6社体制への集約、そして85年のブラザ合意後の円高による6社体制の崩壊と99年の海運大手3社へと変遷してきた過程を説明された。また近年の商船三井の「世界海運界のNO1を目指す」経営戦略とその成果や課題、地球環境保全に対応する取り組みなどを詳しく話された。



第11回 平成22年12月16日 公認会計士業界をめぐる動向

小川 泰彦氏

〔昭和53年 商学部卒〕

公認会計士
小川泰彦事務所 代表 公認会計士

小川氏は、1973年に主要国公認会計士団体が参画する国際会計基準委員会の作成した国際会計基準(IAS)から今日の国際財務報告基準(IFRS)に至る経緯と現況を解説された。その中でEUは域内企業に05年からIFRSに準拠した連結財務諸表の作成、また域外企業に07年からIFRSまたは同等の会計基準で連結財務諸表の作成を義務付けていること、また米国でも証券取引委員会が07年11月以降の年度からIFRS適用の外国企業に対して米国会計基準への調整表を不要としたこと、また国内企業に対しては段階的に3段階による強制適用化を検討していること、一方、日本でも10年3月期決算から海外事業を展開する企業にIFRSに基づく連結財務諸表を容認し、12年には同様の企業にIFRSに基づく連結財務諸表作成の義務を課すかどうか判断されることを説明された。



第12回 平成23年1月13日 日口観光事情

中子 富貴子氏

〔平成2年 文学部卒〕

(株)トラベルジャパン 代表取締役
大阪市大 創造都市研究科
博士課程在学中

中子氏は日本の観光産業の経済規模は23.6兆円で、220万人の雇用を生んでいることや、戦後の経済発展と観光政策、日本への海外旅行者と日本人の海外旅行者数の変遷など観光産業の概況を示された後、「観光立国推進基本計画(07年閣議決定)」の各種数値目標と現況を対比され、今後の課題などを指摘された。次に専門であるロシアの観光旅行事情について、国勢の概況を示された後、近年経済発展が顕著であること、訪ロシア外国人が2,134万人のうち日本人が僅か7万4千人で、訪日ロシア人も6万人台と両国間の観光の開拓余地が大きいこと、またその阻害要因として政治問題や渡航手続きの煩瑣性などがあるが、また一方ではこれがロシア旅行専門業者の生きる道でもあるという実情等も語られた。



第13回 平成23年1月20日 弁護士の仕事

山口 健一氏

〔昭和49年 法学部卒〕

山口健一法律事務所 弁護士

山口氏は1日10時間ほど働いている日常の弁護士生活のパターンを話された後、基本的人権を守り、社会正義を貫く弁護士の使命について弁護士法の趣旨を説明された。次に民事事件について、不動産をめぐる紛争やサラ金、詐欺商法、破産、家事事件等々今日の世相を映す様々の事例を説明された。そして豊田商事事件や和歌山毒カレー事件などに関わってきた豊かな経験から、弁護士の役割について民事紛争においては依頼人の希望する解決を目指しながらも、その解決は弱い者いじめになりはしないか、社会的妥当性はあるかなど慎重な判断が重要であること、また刑事事件においても、基本は無罪推定の原則を貫き、有罪の場合にはいかに立ち直り人間らしく生きていくかをサポートすることが重要であることを熱く語られた。



大阪市立大学
創立130周年記念事業

生誕80年 『大阪が生んだ開高健』展

～大学・同窓会連絡会・学友会・開高 健展実行委員会主催～
なんばパークスホールで盛大に開催



参列者左から、倉持有恒会会長、村田アートコーポレーション専務、山中南海電鉄会長、平松大阪市長、西澤学長、野口順子氏（開高氏の妹）、岡村サントリービジネス社長、坂本開高記念館会長、竹山学友会副会長

本学創立130周年記念事業の一環として、大学・同窓会連絡会・学友会・開高 健展実行委員会（有恒会内）が多くの企業・団体の協力を得て取り組んだこの催しは、2月11日（金・祝）、大阪南のターミナル南海難波駅の若者の街、ナンバパークスで開催しました。

この日、早朝から生憎の小雨で寒い日となりましたが、関係者・一般来館者・報道テレビのカメラが待機するなか、午前9時30分パークスホール前でオープンセレモニーが始まり西澤 良記学長の開会挨拶、平松 邦夫大阪市長の祝辞があったあと、華やかなテープカットで開場となりました。

会期は21日までの10日間で、この期間に2月11日、開高さんと親交の深かった釣り文化協会会長 来田 仁成氏、同13日に京都大学名誉教授 作花 済夫氏のギャラリートークも開かれ、入場者数は7,000人超となって連日盛況を呈しました。遠くは広島県から駆けつけた年配の開高ファンもあり、改めてその幅広い人気と偉大さを知りました。会場では開高さんの講演テープに耳を傾ける女性などが多くおられ、それぞれの開高 健を懐かしんでおられました。



西澤 良記学長



平松 邦夫大阪市長





Osaka City University
130th
創設75周年 夢をつかむ

大阪市立大学創立130周年記念

生誕80年
大阪が生んだ

開高健展
Kaiko

■大阪の地

「印象生活」

「市大文藝」

寿星布て腹巻書

結婚記念写真

■渾身の文学

芥川賞記念の
ロンジンの機中時計

「芥川賞授与式」の写真

「裸の王様」専売

「洋道天国」

作家開高健は大阪に生まれ、旧制天王寺中学校、旧制大阪高等学校を経て、1953年(昭和28年)に大阪市立大学法文学部を卒業しました。太平洋戦争中の1943年、中学1年の12歳の時に父が病死して以後、一家を支えるためアルバイトに明け暮れながらも読書に没頭し、創作と格闘しました。その文学的才能は、大学卒業後に就職した寿屋(現サントリー)では卓抜な宣伝コピーとして開花し、文芸誌「文学生」に発表した「裸の王様」で1958年2月、第38回芥川賞を受賞しました。後のノーベル賞作家大江健三郎氏を抑えての受賞でした。

開高健はあくなきバイタリティーで次々と活躍の場を広げました。ルポやドキュメンタリー、釣り文学の書き手としても新しい地平を切り開き、「ベトナム戦記」、「オーバ!」など数々の傑作を世に送り出しました。真実を見据えることに徹した彼の観察眼、人生観は、当時の若者にも大きな影響を与えました。

1989年(平成元年)、食道がんのため、開高健は58歳の若さで疾風怒濤の人生を終えました。没後20年をきっかけに、今また開高文学の再評価の動きが活発になっています。

大阪市立大学が創立130年の節目を迎えるのを機会に、卒業生としてただ一人の芥川賞作家である人間・開高健をはぐくみ、その作家精神を醸成させた「開高の大阪」に光を当て、彼の業績を振り返ります。NPO法人開高健記念会が所蔵する資料を中心に、草稿、書簡、書籍、写真、釣り具、実家模型など約200点を展示します。

■行動する作家

「日本人の遊び場」

「日本人の遊び場」

従軍記者証

ベトナム従軍軍のヘルメット

電話記録簿テープ

ジッポのライター

■自然との対話

アマジンの釣りの
ライセンス

「オーバ!」取材メモ

「モンゴルで
イタワを釣る」専売

愛用の釣り竿

開高健ゆかりの方によるギャラリートーク開催

■2月11日(金・祝)午後3時 来田 仁成氏 NPO法人釣りの文化協会会長
■2月13日(日) 午後3時 作花 清夫氏 京都大学名誉教授(旧制天王寺中学校同級生)
※都合により、日程・講師が変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

お問い合わせ 大阪市立大学(有恒会)内 開高健実行委員会 TEL:06-6605-2087

大阪・豊波
なんばパークス・パークスホール(7階)
〒556-0011 大阪市東区難波中2-10-70
■電車のご利用
南海線「なんば駅」中央口・南口直結
地下鉄東区線「なんば駅」より徒歩約5分
地下鉄千日前線「なんば駅」より徒歩約8分
地下鉄御堂筋線「なんば駅」より徒歩約12分
■お車のご利用
阪神高速 淀川橋出口 淀川口から約10分

キャリア形成ゼミ

2年目

4 月 開 講

経済学部では人材育成目標に「プラクティカル・エコノミスト」の養成を掲げ、その目標達成のための1科目として、企業等で活動されている経験豊かな本学卒業生を講師に少人数の双方向授業を通して学ぶ「キャリア形成ゼミ」を2010年度から開講しました。

その背景としては、これまで6年間にわたって続けてきた経友会講座（産業経済論特講）で70名に上る卒業生が講師を務めるなど講師陣が充実している実績があり、また学生たちから多人数を対象とした講義だけでなく双方向の継続的な授業を期待する声がありました。

このゼミでは学内の通常の学習だけでは得られない「企業の視点」、「社会の視点」を学び多様な視点を総合して考える「実践的で複眼的な構想力」と、「問題解決能力」を涵養します。本年も2,3回生を対象に、前期2クラス（1クラス12名以内）が開設され、それぞれのクラスは社会人講師2名と選任教員1名によって指導されます。2011年度の演習テーマ、社会人講師・専任教員は次の通りです。

松 澤 ゼ ミ

担当教員 松澤 俊雄 教授

■ 講師：青野 栄一 氏

〔演習の主題〕

「銀行は地域企業と
いかに向き合うべきか」

（講師略歴）

平成4年 経済学部卒業、泉州銀行入社。
同行法人営業・融資、経営企画、人事部門に従事。
池田泉州銀行ホールディングス人事企画部を経て、現在同銀行先進テクノ推進部次長。

■ 講師：長畠 譲 氏

〔演習の主題〕

「大都市ターミナルを中核とした
新しい事業展開」

（講師略歴）

昭和57年 経済学部卒業、南海電鉄(株)入社、南海サウスタワーホテル（現スイスホテル）、なんばパークスなど不動産開発事業に参画。現在、南海電鉄(株)難波・SC営業本部PM事業部 部長。

柴 田 ゼ ミ

担当教員 柴田 淳 准教授

■ 講師：藤井 吉郎 氏

〔演習の主題〕

「あなたは、その国に売り込むには
どうしますか？」

（講師略歴）

昭和34年 商学部卒業、住友商事(株)入社。
以降、平成5年まで同社勤務。多年、ヨーロッパほかで海外勤務を経験。
平成7年 本学大学院経営学研究科後期博士課程修了、学位取得（商学）。

■ 講師：島村 幸光 氏

〔演習の主題〕

「我が国の流通業界の再生の鍵を探る」

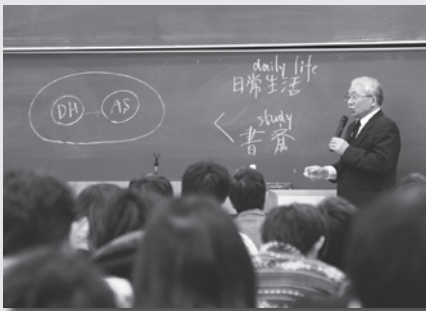
（講師略歴）

近畿日本鉄道(株)入社後、近鉄百貨店に転籍。以後、チェーンストア企業の要職、百貨店本店次長等を経て(株)エーエム・ピーエム近鉄代表取締役社長。現在、YSソリューション代表。
平成10年 本学大学院経済学研究科(中国経済論)前期博士課程修了。

3人の先生が定年退職

春は人生に大きな節目を迎える時期でもあります。入学、卒業、就職する人あり、またある者は転勤、異動、退職を迎えます。本学では長年経済学部で研究を重ねられ、学生たちを教育指導されてきた3人の先生、長沼進一教授(昭和52年4月から34年間在職)、白銀久紀准教授(昭和60年4月から26年間在職)、山下英次教授(昭和63年から23年間在職)が定年を迎えて退職されることになり、3人の先生方は恒例の退官記念講義をされました。

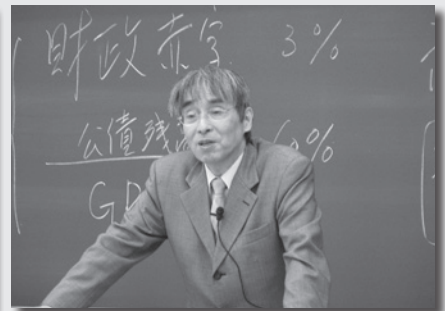
それぞれの講義日には協村研究科長・学部長が出席され、先生の略歴を紹介するとともに在職中の功績を称えて感謝の言葉を述べられました。それぞれの先生方が教壇を降りる際には、駆けつけたかつての教え子たちから花束が贈呈されるなど、記念講義は先生の長年のご労苦への感謝とねぎらいの場にふさわしい情景となりました。先生方の今後のますますのご健勝とご活躍をお祈りします。



白銀 久紀 准教授



山下 英次 教授



長沼 進一 教授

白銀 久紀准教授は、1月28日満席の大教室で「経済学史研究と『十八世紀英国』遊学』と題して、はじめに学問をする態度について趣味の能楽を引き合いに「知之者 不如好之者。好之者 不如楽之者。」とその心境を述べられた。そして専門の経済学史の講義を振り返り、自分の歩んできた研究の過程を能楽やジャズの話に置き換えながら最終講義を楽しむかのごとくゆったりと話され、最後に自戒の言葉として、「経済学・政治学は80歳を過ぎてから大成する。」と結ばれたのが印象的でした。

山下 英次教授は、2月8日「大変革期の世界と日本の選択—いまこそわが国の針路について語ろう」と題して、学術情報文化総合センター文化交流室で、はじめに「日本の輝かしい未来を創るために」として安全保障問題に関する国民の覚悟が必要と切り出された。大河ドラマ「龍馬」と「坂の上の雲」の時代背景を引き合いに出して、今の日本の国家的課題もその時代とよく似ていると指摘され、現在の安全保障体制について踏み込んだ持論を展開された。

長沼 進一教授は、2月22日「大阪市財政危機と再生」と題する講義で大教室の教壇に立たれ、大阪市財政の危機的状況について詳細に語られた。一般的に地方財政が危機に陥る要因として地方交付税の対象外である任意事業の肥大化、特別会計・管理団体への繰り出し・貸し出し増加などを挙げられ、大阪市においてもこれら会計間の出し入れが巨額に上っていることや、直近の23年間に予算規模が市税収入に比して大きなアンバランスが生じていることを指摘され、最後に市政改革の進め方で経営者(市長)、職員に課せられている責任について述べられた。

●●●● 転居先を教えてください! ●●●●

毎年、転勤・結婚・帰郷などさまざまな事情で会員の転居があります。新年度を迎えるたびに特に転勤による異動が多く見られます。このうち下記の人たちの新住所が分からないため経友会ニュースの送付ができなくなっています。この人たちの住所や電話等がお分かりの方には事務局まで情報をお寄せくださいますよう、よろしくお願いします。

経友会事務局担当 出原 康雄 (S42年卒)
FAX : 072-238-9525
E-mail : keiyukai07@sakai.zaq.ne.jp

転居先不明の会員 (平成21年9月以降)

(敬称略)

卒業年	氏 名	卒業年	氏 名	卒業年	氏 名	卒業年	氏 名
S. 29	武田 三夫	S. 54	植田 健三	H. 10	天野 尊元	H. 16	奥野麻衣子
S. 29	松田惣三郎	S. 55	梶本 武史	H. 12	衣笠 洋子	H. 16	松井英一朗
S. 29	森本 泰三	S. 55	前田 邦彦	H. 13	久本 貴志	H. 16	新道 亮
S. 29	茶之木 太	S. 59	森井 茂	H. 14	中塚 信幸	H. 16	楊 霽日勺
S. 29	福富 彦衛	S. 59	名嘉座元一	H. 14	河田 直樹	H. 16	疋田 和也
S. 30	藤川 洵	S. 62	斎藤 英紀	H. 14	太田 裕也	H. 16	久世 晶代
S. 37	坂川 富昭	S. 62	武次 聡史	H. 15	尾山 洋介	H. 16	李 承勲
S. 37	高田 英夫	H. 1	山邊 憲嗣	H. 15	北川 慎吾	H. 16	由比濱 剛
S. 39	奥地 重雄	H. 2	菅原 俊廣	H. 15	山本 優介	H. 16	井本 浩介
S. 42	西田 久男	H. 2	多田 征弘	H. 15	埜中 靖弘	H. 16	加藤千香子
S. 43	谷口 忠誠	H. 2	森山 学	H. 15	阿比留友輔	H. 16	中西 潤
S. 43	上野山 実	H. 4	佐藤 広猛	H. 15	中西 敦信	H. 16	山田 暢子
S. 43	天野 忠明	H. 5	飯田 隆仁	H. 15	長谷川孝明	H. 16	坂本 輝昌
S. 44	古賀 英俊	H. 6	鈴木 正好	H. 15	小林 庸平	H. 16	猪口 英郎
S. 45	富山 政司	H. 8	佐藤 伸夫	H. 15	稲富 聡	H. 16	戸井田明良
S. 46	高谷 実	H. 9	吉田 與一	H. 15	坂田 直也	H. 21	邊見 彰貴
S. 46	柏原 利幸	H. 9	近藤 玲子	H. 15	小西 史顕	H. 21	福島 健治
S. 47	高山 芳典	H. 10	戴 清清	H. 15	塩見 翼	H. 21	加藤 茂弥
S. 47	西口 徹	H. 10	李 態妍	H. 16	泉谷 和樹	H. 21	高木 良彰

編集後記

脇村学部長からお聞きしたところでは、西澤学長は同窓生の大学に対する支援力をより大きな力に結集するため、各学部の同窓会を統合して全学一体の同窓会組織にしたいとのご意向をお持ちであり、在任中にぜひ実現したいと意欲を燃やしておられるとのことでした。

もとより文系学部同窓生は、戦前から存する有恒会を4学部統合の同窓会とし、各学部同窓会はその傘下にある一単位(単位同窓会)との認識を持って活動してきたところですが、理系学部にあってはいろいろの事情からそれぞれ単独に学部同窓会として今日まで継続されてきたようです。

私は、この統合化の動きと経友会の考え方について常任幹事会でもご意見をいただきたいと思います。大方の同窓生には全学同窓会へ一本化することに異論はないと思っておりまして、医学部ご出身の現学長には早期実現に向けてご努力をいただき、是非、全学同窓会への再編を実現してほしいと考えています。

今日、有恒会地方支部では出身学部を問わず一緒に集い活動しています。職域同窓会でも同様だと思います。地方では、事実上有恒会が全学統合の同窓会としての役割を果たしているといえるでしょう。

そこで全学統合の同窓会の名称について提案したい。我田引水と言われようと、同窓会の名称を「有恒会」としてほしい。前述の有恒会地方支部の実績があることと、如水会といえば一橋大学、凌霜会といえば神戸大学というように全国的な知名度を重視すべきで、全学同窓会の名称はやはり伝統があつて知名度が高い「有恒会」の名をもってするのが最善と考えています。

(事務局長 出原 康雄 記)